

【成果報告】

1. 本研究の背景と SDGs との関連

近年、高等教育の英語教育は、生成 AI の急速な進化への対応や、中国やベトナムなどアジア諸国からの留学生増加を背景に、世界的な変革が求められている。本研究は、このような状況下で、流動的で主体的なトランスランゲージングがどのように利用されているのかを調査し、生成 AI の役割を考慮しながら言語や教育の視点から SDGs 目標達成に向けた提案をする。トランスランゲージングは、国や文化の枠を超えて相互作用を促す思想的アプローチで、ポストヒューマニズムの視座と共鳴している。

関連する主な SDGs 目標は、SDGs 目標 4「包摂的かつ公平で質の高い教育の提供」で、「グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解」（ターゲット 4.7）を促し、SDGs 目標 10「国内および国家間の格差の是正」に向けた、「安全で規則的かつ責任ある移住や流動性を促進する」（ターゲット 10.7）ことである。

2. 研究対象と研究課題

本研究は、英国の4つの地域（スコットランド、北アイルランド、ウェールズ、イングランド）の5校の国立大学で留学生と英国学生の約 200 人の大学生を対象にトランスランゲージングに関する調査が主な研究実施内容だった。英国は、EU 離脱により EU 諸国からの留学者が激減した。その一方で、中国、インド、ナイジェリア、パキスタンなどグローバル・サウスからの留学生を戦略的に増加させ、コロナ禍でもその数の減少を抑えたため、言語や文化の多様化が進んでいる現状がある。

調査の結果、90%を超えるさまざまな国籍や言語を持つ学生がトランスランゲージングをあらゆる場面で実践し、英国国籍の学生も含めて、この言語形式を肯定的に捉えていた。例えば身近な例として、中国からの留学生は「I often use “今日要唔要一齊食 lunch”」と、トランスランゲージングの実践を回答した。今日一緒にご飯食べない？という意味をこのように表現することにより、会話の相手との心理的距離を縮め、自然な言語使用で互いの理解を促す効果を期待していた。

3. 日本の高等教育への応用

本研究は、状況や環境に固定した言語ではなく、環境と言語使用者の相互作用に焦点をあてるトランスランゲージングがグローバルな英国の環境で自然に実践され、高等教育の教室内外で教員も含め、異文化理解やコミュニケーション促進の手段として肯定的に捉えられていることを明らかにした。

日本も留学生を増加させる政策を進めているが、英語教育や英語を通したコンテンツ授業において、欧米圏の英語を単一的に使用する傾向がある。しかしそれは、生成 AI に任せることで人間とテクノロジーの共生が可能になる。本研究では、言語資源の混在や共存で生まれる持続可能な教育の在り方を国内外の学会で提案をした。

